HINA MATSURI
Culture Promotion Association
ひな祭り文化普及協會

雛祭り起原考

平成 23 年 1 月吉日　ひな祭り文化普及協會

構　　成　　弥栄女

資料提供　菅原二郎

雛祭り起原考・要旨

雛人形の生まれた時期

雛人形という名のお人形が現れたのは室町時代末期です。「をびな」の衣裳は「衣冠束帯」、「めびな」のそれは「十二単(正式には五衣唐衣裳＝いつつぎぬからきぬも)」という、他の人形には見られない風格と豪華さを備えた一対の雛人形は天皇の住居を指す「内裏(だいり)」から「お内裏さま」と親しみをこめて呼ばれました。お内裏さまとは一対の雛人形をさし、お雛さまとは雛人形の 15 人全てを意味します。

雛祭りの起原について

雛人形を飾って『雛祭り』という行事が始まったのはいつ頃からでしょう。
江戸時代、天下の実権を握った徳川幕府は武家の新たな制度、行事などを整備していきましたが、その一環の中で、「五節句」を定めその一つを「桃の節句」として三月三日を祝い日に定め、雛祭の行事を城中で公式に行うこととします。この『節句』とは中国由来の風習で、古くは『節供』と書き日本では季節の節目に旬の食材を神さまにお供えし無病息災や五穀豊穣を祈願しました。ひな祭りでのお供えは蓬の入った草もちや邪気を払うという言い伝えのある桃の桃花酒でした。

‘雛祭りの起原’については様々な言い伝えがありますが［雛人形］は室町末期に生まれ「雛祭」の起原を徳川幕府制定の時とするのが歴史的資料としても証左するものがあり妥当な考え方と思われます。また『雛祭り』という言葉が生まれたのは江戸時代中期以降です。

女の子の初節句としての雛祭りについて

さて、今のような五段,七段といった段飾りは江戸後期に生まれ、嫁入り道具を網羅したお道具も増え夜は雪洞〔ぼんぼり〕を点火して親戚友人を招いて饗することとなりました。また女の子の初節句を祝うようになったのも江戸後期のようです。これから後の、明治、大正、昭和と時代ごとに変化と盛衰はありましたが、三月三日の雛祭の風習は連綿と続けられて今に受け継がれ、雛人形に娘の幸福を願う意をこめ、華やかな風物詩として愛好されています。

雛祭り起原考

ひな祭り文化普及協會　構　　成　　弥栄女
資料提供　菅原二郎

— は じ め に —

一、天児（あまがつ）と這子（ほうこ）。　「まじないの対象物」

二、ひいな。　「幼児の遊戯の対象物」

三、三月上巳の日と「ひとがた」流し。　「呪術の対象」

四、加太守雛(かだもりびな)。　「信仰の対象物」

五、まとめ「雛人形」の発祥とその推移。

六、まとめ［雛祭り］の起原とその変遷。

— 結　　び —

■全六章よりなり、五章・六章はまとめとなっております。
＊数字＝注釈　＊図＝画像　—緑字—＝引用文　ふりがな＝(　　)

― はじめに ―

雛人形に添えられたパンフレットに「雛祭りの起こり」と題した一文があり、それを読んで、よく分らないなという印象を持ったのが事の始まり。こう言うとき素人が疑問解決に手にするのは百科全書です。そして、三、四のものを読み比べると、大体似ている部分と全然違う部分とがあり、どれが正しいのか迷います。中には勿論、一般に常識的に口にされているものもあり、それを否定するようなものもありでかなり混乱を覚えました。

一つ分ったことがありました。それは、‘雛祭りの起原’に関しては総べて＊1 古代の宮中行事から出た、という解釈から論じられているらしいことです。

そこで、雛祭りの源流という所説を少し取り上げ、検証を試みてみました。そして意外なことに気付き驚きました。それは、古代に＊2 唐の国から入って来た「＊3 祓(はらい)の＊4 呪術」とわが国固有の「＊5 禊(みそぎ)の行事」が＊6 習合したという固定観念から所説をつくりあげていることです。その結果、牽強付会（けんきょうふかい⇒むりやりこじつける）の説も生み易く、あいまいな部分が残ってしまいます。

ということで、常識で読んでいて、あいまいだなという部分がちょいちょい出てくることが納得できました。そこで、検討したいくらかの所説の中の、主な柱となるものを記してみます。

‘雛祭りの起原’を検討するのに、次の二書を底本とし、その他いくつかの書を援用してみます。

『 ＊7 有職故実 』（国文学大講座刊行会昭和十年刊、著者:風俗研究所長＊8 江馬務）

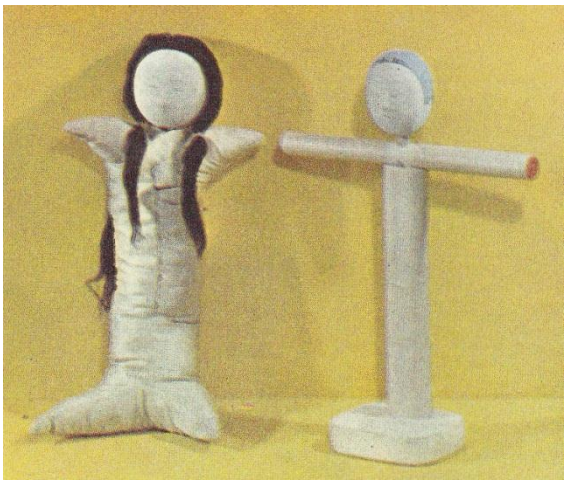
『 雛祭新考 』（思文閣出版昭和十八年刊、著者有坂與太郎 ）主に両書から抜粋引用させて頂きますが、出来るだけ原文説明の形で、原文は避けたいと思います。

注釈

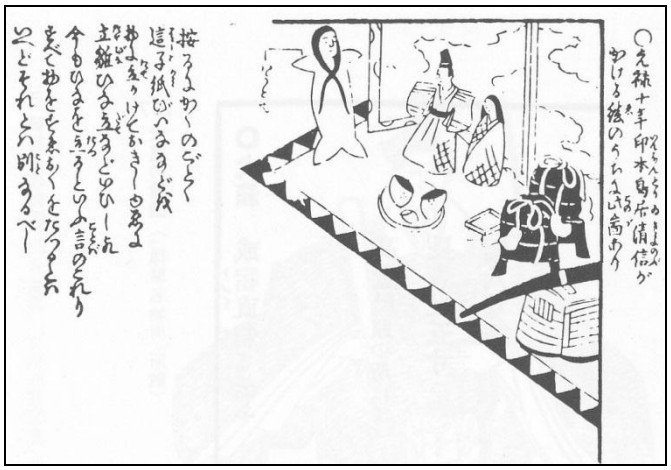
＊1 古代-日本史：王朝時代。即ち飛鳥時代から平安時代まで。律令制国家として、奈良時代と平安時代を指す場合もある。
＊2 唐-中国の王朝(618 年-907 年)
＊3 祓い-神道 上において犯した罪や穢れ、災厄などの不浄を心身から取り除くための神事
＊4 呪術-祈祷や占いなど日本ではマジナイとして知られる。
＊5 禊- 神道や仏教で自分自身の身に穢れのある時や重大な神事などに従う前、又は最中に、自分自身の身を氷水、滝、川や海で洗い清めること。
＊6 習合-さまざまな宗教の神々や教義などの一部を混同ないしは同一視し一つの信仰体系として再構成すること。
＊7 有職故実-宮廷の官職や故事を知る学問のことで、時代によって変わっていく制度に伴う典礼歳時などの変化を、その時代の研究者が書にまとめて伝え、現代に至るまで伝統は受け継がれている。
＊8 江馬務- 1884－1979 大正-昭和時代の風俗史学者。

一、天児（あまがつ）と這子（ほうこ）。　「まじないの対象物」

雛祭り起原について流説の中に大抵この＊1 図 1 天児と這子が登場している。まずこれの検証から始めてみよう。



＊図 1 天児(左)と這子(右)
〈『平凡社国民百科事典』所載〉



＊図 2 雛人形と「天児」「這子」
〈『骨董集』所載〉

天児と這子

―古代、疫病を祓う為に路傍に＊1 草ひとがたを立てる風習が生じていたが、やがてそれが身代わりに災厄を引き受ける「ひとがた」をつくってわが身を清めるものとへ転化した。それはわが身に着けるもの、家屋内に安置するものとして小型のものとなった。これを撫で物と呼び、天児と這子が知られている。これらは「ひとがた」、「形代」（かたしろ）、「人の形」と総称され、祓の人形(にんぎょう)とされた。―
平凡社刊　百科事典　より

そこでこれは、呪術的、信仰的なものと理解したが実はそうではないらしい。

―この人形は「比々奈(ひひな)」もしくは「阿末加津(あまかつ)」といわれ、「比々奈」という方は大体男女、年齢、服装などをも表現している人形であるらしく、「阿末加津」は極めて概略なものであったようで、祓の場合にも何れでもその効果に甲乙の区別はなかったものであろう。　　中略　ともかくこの天児、這子は＊2 中世に於ける祓の人形として行われて、後世におよんだものであった―　日本歳時全史　江馬務著作集　より

とあるが、この「人形」とあるのは、勿論後世の「人形(にんぎょう)」と同じ呼称ではない。「草ひとがた」は＊3 神功(じんぐう)皇后が、等身大の草人形を作って人の身代わりとしたことに由来する。これを小さくした立ち姿を象形化して単純、素朴な形の天児、這子となってからは、これを幼児の災厄をはらう形代として身にそえて用いる風習が生じた。これは宮廷貴族のものだったようだ。

然しこの人形は、期日を定め祓いの儀式に用いるものではなかった。多分、祭神の前で祓いを受け、その後は子供の肌身に着けるとか、家内のどこかに安置するとか、要するに現代でも広く行われている「お守り」のような扱われ方であるらしい。呪術の祓のような窮屈な儀式のものとは違い、意識、観念の上では親しみ易く手軽な存在であったようだ。いうなれば原始的な、こうすれば災いがやって来ないというような素朴なまじないのようなものだったかも知れない。後世の、縁起がいいという表現に似たもののようだ。

この風習は連綿（れんめん⇒絶えることなく）として受け継がれ、雛人形が出現し、雛祭りが始められると、貴族たちは、雛飾りの傍にこの天児、這子を添えて飾った。現代昭和の時代に貴族の一人が、天児、這子を雛祭りの雛壇に飾った記録もあり、現物も存在している。　　―参照　平凡社百科事典―

にも拘わらず、この天児、這子はさまざまな解釈にさらされるような数奇な歴史を残しているらしい。第一、名称からして、何時の頃か不明だが、天児が、「比々奈」と「阿末加津」の二つ名を持つようになり、「阿末加津」は人の形の概略、「比々奈」は男女、年齢、服装なども表現した人形であった。「這子」は「祓い子」から来ている。　―江馬務著作集　中央公論社―

この著作集の中で、紹介されている　「みやのめ祭考」　明治十二年十月考古界誌　桜井　秀博士著（桜井氏は当時風俗史の第一人者と呼ばれた権威である。）によれば、―近世の雛祭はその一部の起原を‘みやのめ祭り’に発したもので、祓の人形の影響ありとの説は採るにたらぬ―とあって、この‘みやのめ祭り’は正月上午日をはじめ十二月にも行われたこと、祭神の前に供物を供え、家族の人数の比々奈を添え祭文を朗読して家族の幸福を祈った。「＊4 寛永六年西洞院時慶卿記(さいとういんじけいきょうき)」より―とある。どうもよく飲み込めないが、「比々奈」とあるので、「天児」の歴史的変遷の一ページではあろうが、その時代以前の変遷はよく分らない。

時代が下って雛祭りが行われるようになると、雛人形に添えて、「天児」「這子」がそっと添えられたという記述は散見する。＊図 2 雛人形と「天児」「這子」
然しながら、ここで注意しなければならないことは、同じ雛壇に並べてある「天児」「這子」はまじないの対象物としての「お守り」であり、「雛人形」は愛玩物としての飾りものであることだ。雛人形は後に、女児の先行きの幸せを願う対象とされるようになったが、それは信仰的なものではない。雛人形に就いては項を改めて述べることにする。ここでは天児と這子が雛人形の出現に何らかの役割を担ったとは思えないとのみ述べるに止める。

注釈

＊1 草ひとがた-草でつくった等身大の人の形をしたもの
＊2 中世-一般的には平安時代後期から鎌倉時代、南北朝時代、室町時代、戦国時代までを中世といい、織田信長の上洛（1568 年）以降を近世とする。政治史的には武家政権による支配が特徴。
＊3 神功皇后-『日本書紀』などによれば、夫の仲哀天皇を助けて 201 年から 269 年まで政事を執り行なったといわれる。
＊4 寛永(かんえい)- 日本の元号の一つ。元和(げんな)の後、正保の前。1624 年から 1643 年までの期間を指す。この時代の天皇は後水尾天皇

二、ひいな。　　「幼児の遊戯の対象物」

平安時代の＊1 源氏物語、他の文学書に散見する「ひいなあそび」の源の大対象物が「雛人形（雛人形）」の起源とする見解は、次に触れる上巳の日と共に、雛祭の起元のような記述が多い。いや、多いというより、殆どの起源と称するはここから始まっているようだ。
ことに源氏物語の記述に＊2 紫の君の「ひいなあそび」のあるのを引用し、「ひいなあそび」が宮廷の成人男子の間でも盛んに行われた風習かのように述べたものがあるのは解せない。女児と同じく幼少の男児は女児と共にあそんでいるのだが。

同じ源氏物語の記述に、（紫の君が「ひいなあそび」をしているのを見掛けた女官が呆れて、紫の君はもう「ひいなあそび」をする年齢ではないのに未だやっていらっしゃると言った）とある。宮廷では「＊3 とおにあまる」年齢をもって、女児は成人並みの扱いを受けるようになり、それ以降は幼女の遊びに手を出すものではないとされていたようだ。

即ち、「ひいなあそび」は大人の宮廷人の遊びではなかった。又、この「ひいなあそび」の対象は、人の姿をかたどったとはいえ、リアルに模したものではない。素材は紙、藁などであったらしく、手足を広げた形が人の形に似ているだけの単純素朴なものだったともいわれているらしい。

もっともこれは、はっきりとそれを裏付ける確証があるのではなさそうだ。しかし、当時「紙」は貴重品であり、幼児の遊び道具に無暗と使い得るものではなかった。人の形だけではなく、御殿だとか、調度なども作ったようだが、それは絵で表し、紙のみではなく、藁(わら)しべなども材料とした、あくまで象徴的な素朴なものであったという説明は納得できるものである。

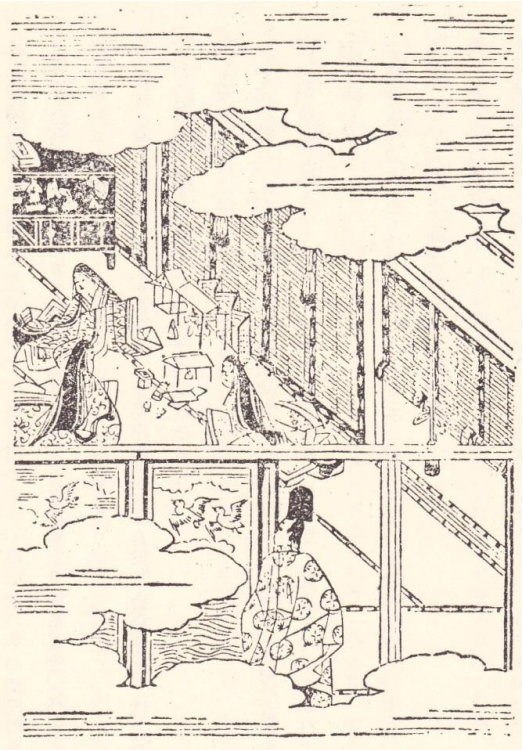


*図１ひいなあそび<慶安本『源氏物語』所載>

ところで「ひいな遊び」に関して多くの物語草紙類の記述が引用されるが、その他では、よく引用して説明の資とされるものに、江戸時代の「慶安本源氏物語」がある。これは源氏物語を要約し、主な場面を絵で表現したものだ。その中の一場面に「ひいなあそび」がある。広い座敷で三人の女性（多分幼女のつもりだろうがかなり大人びた感じに見える）が坐り、彼女達の間には小さな御殿を模したもの、御簾(みす)のまえには屋根のある建物、その下に立ち雛が二三体見える。襖が二枚開け放たれ、その外に立って部屋を見ている烏帽子姿の男性は多分光源氏であろう。
『雛祭新考』ではこの絵を転写所収している。勿論それ以外の、物語草紙類からの引用を多様に用いて説明がなされているのは言うまでもない。そして、

―かくのごとく児童の遊戯の中にその日常の起居状態が縮写されていた―
と、それまでの物語草紙類からの引用に、この絵を援用する形で、
―これが雛祭の目標とする雛人形の原始的形態をなしている―

として雛祭の雛人形は「ひいなあそび」の「ひいな」が進化したものとみていい、と自説を提起している。

この「慶安本源氏物語」には後で触れるとして、『雛祭新考』の所説をもう少しとりあげてみたい。

―物語草紙類に描かれたひいなあそびに対する大人の観念は、平安期の児童生活とそれによって生ずる遊戯の本質について、幾多の好資料を提供してくれる。即ち
一、　ひいなあそびは幼児の遊戯に限定されていた。
二、　ひいなあそびは女性の生活に浸透していた。
三、　しかしながら、ひいなあそびの対象者は女児ばかりではなく、男児もこの遊戯に参加したこと。
四、　ひいなあそびは女性の心理を解明し、＊峻厳(しゅんげん)に親と子の愛のつながりを追及しつつ、純愛の本質を明らかにしていること―

として、又源氏物語を引き合いにした説明がなされている。
何やら、道徳の教科書の趣きがないでもない。この内の三、に就いては既に述べた。一、に就いても異論はないが、二、に就いては、大人の女性が懐古的に述べたり、可愛いものの比喩に「ひなのような」と表現したりとか、思い出にするのは逆に自分の幼かった頃からすれば段々と薄れて行くものへの、哀惜のようにも思えるものもある。四に就いては一寸首を傾げる。もっと柔らかい言葉で表現していればうなずけるかも知れないが、ひいなあそびという子供の遊戯がそのように御大層なものに扱われるのには違和感を感じる。

というようなことで、先出の「慶安本源氏物語」に就いて述べる。

まずこれが書かれたのは「慶安年間」江戸時代の初期（１６４８～１６５１）である。書かれている絵をよく見ると、広い座敷、襖、御簾、奥の方に見える調度。すべて、源氏物語の舞台である平安宮廷とは似ても似つかないものである。これを描いた絵師は多分、平安時代の宮廷の有様など知識がなく、当時の武家の屋敷内を模し、物語に添って想像の雛祭、雛人形を描いたものではなかろうかと思われる。これを資料として取り上げ、源氏物語の世界の雛人形を表したものとするのは誤りとしか云えない。

源氏物語の絵としては室町期に描かれた絵巻は数あるらしいが、この絵巻の中に先述のように、一見して、時代様相が違うとわかるものもある。その造作物を資料として扱う為には時代相をよくよく勘案した想像力が必要だと思う。因みに、室町時代以降につくられたもので、古い時代に関するものは、その＊4 真贋(しんがん)は＊5 玉石混交(ぎょくせきこんこう)といわれる。＊図１慶安本源氏物語

専門家の間ではよく知られていることに、「＊6 遣唐使船」の絵巻がある。これは、造船関係の専門家によれば、室町時代当時の明の商船を描いたものだろうと云われている。その時代なら、明の商船は交易の為訪れているし、その姿を写したものがかの国に現存している。この船なら目でみて模写も出来る。然し、平安時代の遣唐使船は、文字の記録はあっても、実際の姿は後世の者が見ることは出来ない。船の歴史を研究する学問が出来てある程度の実体は解明出きるになった。ところがこの遣唐使船、現代になって、この絵をもとに実際に建造され、「遣唐使船」として様々な使いようがされている。

何故このような関係のないことを述べるかと言うと、雛人形、雛祭などの来歴が、時代によって歪曲され、又は目的あって我田引水の説をとなえ、それを文書で残し、後世の者を惑わすということもあるようだからだ。文献引用の際は、その精査が必要だが、これは素人の出来ることではない。

以上で「雛祭新考」からの、「ひいなあそび」に就いての摘出引用を終るが、この「ひなあそび」が何時の時代まで行われていたか、それを証するものは見当たらない。まして、この「ひいなあそび」が後世の「雛人形、雛祭」に転化した証跡もなく、「雛人形、雛祭り」を生むファクターとなったとする接点も、又見当たらない。

「ひいなあそび」はある時代、宮廷女児男児の間で習慣的に楽しまれていた遊戯として、それ以上の意味はなさそうである。

源氏物語の時代に、宮廷女児の遊びの習慣は後世まで受け継がれることなく、何時の間にかすたれ、何の脈絡もなく後世、雛人形が出現したと考える方が当を得ているような気がする。

つまり、「ひいな」と「雛人形」の接点は、「ひな」の呼び名だけであり、「ひいな」は幼女の遊び道具に過ぎなく、その遊びの日は不定であるのに替え「雛人形」の方は三月三日に飾る習俗として大人も子供も参集する祭りとして定着しているもので、両者の間には歴史の長い時間の断絶があり結びつけるのは困難と考えられるのである。

注釈

＊1 源氏物語-紫式部の著した、通常 54 帖よりなるとされ、おおむね 100 万文字に及ぶ長篇で、800 首弱の和歌を含む典型的な王朝物語である。
＊2 紫の君-後に光源氏の妻となって**紫の上**と呼ばれた『源氏物語』のヒロインの初めの名前。架空の人物。
＊3 とおにあまる-11 から 12 位まで
＊4 真贋(しんがん)- ほんものとにせもの。
＊5 玉石混交(ぎょくせきこんこう)- 良いものと悪いもの、優れたものと劣ったものが入り混じっていること
＊6 遣唐使-**倭国が唐に派遣した朝貢使のことをいう。中国では 619 年に隋が滅び唐が建ったので、それまで派遣していた遣隋使に替えてこの名称となった。寛平 6 年（894 年）に菅原道真の建議により停止された。**

三、三月上巳の日と「ひとがた」流し。　　「呪術の対象」

＊1 上巳(じょうし)の日について

三月上巳の日は三月三日である。「有職故実」によれば、

―中国では、巳(み)は古来＊2 陽の極まる日で＊3 不祥日とされ、＊4 魏の時代からはそれを三月三日とした。―

とあるが、同書の記述ではどうも判然としないところが多い。同じ中国の故実に、この日、水辺に出て汚れを払った風があり、わが国に伝えられては、奈良時代、何故か同じ水辺でも「＊5 曲水の宴(きょくすいのえん)」という宮廷の風流な行事になった。不祥の日の祓いが何故風流の宴になったのか定かな説明はない。続けて同書では、

―平安朝になってから、唐の国にならって上巳の日を不祥の日として祓いをした―

―源氏物語須磨の巻に、光君は巳の日須磨海岸で、＊6 陰陽師を召して祓をさせ舟に人形(ひとがた)を載せて流しし事が見えている。人形は偶像で自己に擬し、一撫一吻といって手で撫で一度息を吹きかけ、わが身の汚と心の汚を人形に移し、これを海中に流し清浄潔白の身とならんとしたもので、三月三日に人形を祓に用いし風は後世雛祭りの起原になっている―

とあるが、後世の雛祭りの風習から考え、この説、中々納得出来るものではない。

「有職故実」にはこれ以上の記述はない。巳の日の祓に就いて、これが宮中でどのように行われたか、それは書かれていなく、この行事が何時頃まで続いたのかも書かれていない。光君の祓は具体的に書かれていても、その同じ日宮中で祓の儀がどのように行われたかその記述がないということだ。それが何故不審なのか同書の、六月の行事の記述を見れば納得出きるだろうと思う。

六月は「＊7 大祓い」と記述されていてこの行事は一日より十日まで、十一日、十六日、と祓に関した行事があり、これらはすべて中国由来のものではなく、わが国固有の、神代以来の[禊(みそぎ)]につらなるもののようだ。そして三十日には天皇御自身の＊8 玉体の祓の儀があり、その後、「六月祓(みなつきはらい)」と呼ばれる国民の罪汚を祓う儀が行われる。この祓に就いて同書はこの月の行事は具体的に詳述し、また、その時代に依って変化した歴史、江戸時代まで続いていることの記載がある。祓の為に奉仕する人も決まっていたようで、江戸時代からは＊9 吉田家が奉仕したと書かれている。現代に就いては触れられてはいない。これはこれが書かれたのは昭和十年だから、宮中のことに触れるのは禁忌（タブー）だったからだと思われる。

この記述と比べた時、上巳の日の祓に就いて具体的な記述もなく、その後の歴史的変遷に触れることもないのはそれに関した記録が無い為としか考えられない。ということは、中国由来の故実から祓の日を定めたものの、長い年月続かなかったのでないかと思われる。

注釈

＊1 上巳-上旬の巳の日の意味
＊2 陽の極まる日-中国では奇数を陽数として好み、偶数を陰数として嫌う思想が昔からあった。「一」は陽の本源、「二」は陰の本源、陰陽の本源が合体して、森羅万象を創り出すと考えられている。したがって、陽数は三から始まり、九に極まる。また奇数（陽）が重なると陰になるとして、それを避けるための避邪〔ひじゃ〕の行事が行われた。3 月 3 日は奇数の陽が重なっており、陽の極まる日といえる。
＊3 不祥日-良くない、不吉な日
＊4 魏-元来中国古代の都市国家のひとつであり王朝の名。
＊5 曲水の宴-流れてくる盃が自分の前を通りすぎないうちに詩歌をつくり、盃を戴く平安時代の宮中行事を再現する祭事。
＊6 陰陽師-古代日本の律令制下に於いて中務省の陰陽寮に属した官職の 1 つ.後には本来の律令規定を超えて占術・呪術・祭祀をつかさどるようになった
＊7 大祓い-6 月と 12 月の晦日（新暦では 6 月 30 日と 12 月 31 日）に行われる除災行事である。犯した罪や穢れを除き去るための祓えの行事で、6 月の大祓を夏越の祓（なごしのはらえ）、12 月の大祓を年越の祓（としこしのはらえ）という。6 月の大祓は夏越神事、六月祓とも呼んでいる。701 年の大宝律令によって正式な宮中の年中行事に定められた。
＊8 玉体-玉とは天皇の身の周りのものを尊称するための接頭辞。玉体は天皇の御身体のこと。
＊9 吉田家-公卿(くぎょう)の家の名。

平安時代の前、奈良時代の風俗は唐風一辺倒だった。勿論、官制、文化全般もそうである。平安時代に入って和漢折衷へと変化していくが、菅原道真が遣唐使を廃止してから、わが国独自のものへと変化するのが速まったように思われる。更に時代が下り、鎌倉時代以降、武家が天下を握り、武家独特の制度、行事などを創設した。そして時代と共に武家のそれが宮廷に取り入れられ、由来のものが少しずつ変革されて行った歴史もある。その時代の流れの中で、「上巳の日の祓」の行事は霞んでいったのではないか。従って記録もなく、有職故実で取り上げられなかったのではないか。

証左とするものを持たないので、憶測かも知れないが。時代によって書き換えられた有職故実を追跡調査すれば判然とするかも知れないが、それは専門家の仕事であり又、ここでは必要もないことと思う。「上巳の日の祓」に関して、後の文献を騒がしたものはないように思えるし、江馬氏がとりあげていないからだ。ここらあたり少しあやふやなのは仕方がない。

そこで「雛祭新考」を見てみよう。
著者の有坂與太郎氏は恐ろしく博学で、引用文献もまた夥(おびただ)しい。然し、「禊祓を根底として＊1 胚胎(はいたい)せる雛祭の＊2 濫觴(らんしょう)」の項に、

―ここに云う祭りの根本理念も、又禊祓による民族の伝統的情操と深遠な信仰力とが根底になっていて、其処には日本人のみが持つ、美しい清い感情が流れている―

とあるのは未だしも、
―日本の国体と文化と、国民の精神と生活とを形成し進展せしめつつある日本国民の根本観念は、清浄と崇祖とを基調とした敬神観念によって根深い特性が見出される―

と続くのを読めば現代人は、そこでつまずきこの一巻投げ出すかも知れない。だが、これは、戦時中という時代を考えればとがめられるべきものではない。内容そのものは、「雛祭り」起原に就いて多彩な文献引用と見解を述べ、当時の国民精神高揚とか、＊3 国粋主義の鼓吹(こすい)を目的としたものではない。雛祭史解明に多くの示唆も含む立派な仕事と拝見した。然し、根本的なところで、違う、違うという違和感がありその見解の多くに納得できないものがあり受け入れがたい。それでも尚この書を取り上げるかといえば、同書の取り上げた多量の文献とその見解を参考に、雛祭り起原に就いて不明なところをいくらかでも補う教示が欲しいからである。

―上巳とは三月上の巳の日を指しているが三月は辰の月に該当するので巳を除日と定め不祥を駆除するために祓を行うことを云う。―

―上巳は祓の思想が漸次衰えて節日化しその呼称が雅遊視されるようになった。―

とあるのだが、上巳の日を祝日とするのは＊4 顕宗天皇元年三月上巳に曲水の宴とあるのが史籍にみえる初めとし、その推移変遷には触れないが武家の勃興から宮中の雅宴は次第に廃れたとある。

ここで一寸した混乱を感じる。引用した所説では、不祥の日として祓をした上巳の日が早くから、祓が廃れ祝日になったように受け取れるが、これはどうもおかしい。
「曲水の宴」とは流水に盃を流す遊びのことである。奈良時代は天皇が川辺に行かれて、文人を召され詩を作らされた。平安朝では宮中＊5 清涼殿御溝水に盃を浮かべられた、と「有職故実」にある。だが、＊6 寛治五年三月十六日関白藤原師実（ふじわらのもろざね）は六条水閣で之を催したと「中有記」の記述も載せている。そして続く記述に巳の日の祓を述べ、光源氏の須磨の浦での祓と人形(ひとがた)流しを記述している。

どうやら、唐から輸入した故実は一方で曲水の宴という遊びとなり、三月三日上巳の日の時日も変わり不祥の祓とは別個な催しとなり、それとは別に上巳の日に祓を行った。従って、この祓と曲水の宴の催しは時日を違えて継続の歴史があった、としか読めない。

「雛祭新考」の上巳の日の説明はまことに分り難い。上巳が節句化しその呼称が雅遊視されるようになったとあるのだが、それは曲水の宴を指しているのだろうと思えるのだが、上巳の祓が廃れ、同じ上巳の日が祝日へと変わる経緯の説明にはなっていない。然し後世上巳の日三月三日が祝日になったのは事実だから、その経緯が判然としないまま、上巳の日の本来の意味である祓にまつわる行事を、後世雛祭りの起原と称するのは飛躍しすぎた論というべきと思えて仕方がない。

図 1 鶏闘

図 2　母子草

図 3　蓬

「有職故実」といい、「雛祭新考」といい、共に雛祭り起原を上巳の日の祓に起原を見る思考は一致しており、この考え方は現代流布されている所説の基本となっているようだが、よく検討してみれば、どうも単純な混同があるようで、これはかなり怪しいものだ。　尚「有職故実」では、三月三日には室町時代から＊7 闘鶏(とりあわせ)が行われるようになった。又武家でも行われたと、上巳の日の説明のあと、何の脈絡もなく記述している。「雛祭新考」では祓の儀は廃れて云ったとは先にふれているが、これもいきなり闘鶏へとんでいるが、こちらの方は闘鶏の行われた後に、華やかな舞の舞台が催されたとやや詳しい説明と、それに就いての見解が述べられているが、双方共に、長い時日の空白を埋める、上巳の日の説明はない。つまり、上巳三月三日の祓は全く断絶しているのだ。「有職故実」は闘鶏同様、何の説明もなく、三月三日の＊8 草餅に触れている。この草餅は、室町幕府では＊9 蓬餅になったと記され、説明はないが、後に雛祭の雛段の色違いを重ねた＊10 菱餅が飾られ、その菱餅の一つが蓬餅といわれるのを以って雛祭起原を上巳の日にみるのに援用のつもりかもしれない。
以上、雛祭り起原と上巳の日の関係を見てきたが、不祥の日として祓の行われた上巳の日三月三日が、何故かまったく正反対の祝い日として残った由縁は判然とはしないが、上巳の日の呼称が何時まで残ったか、もう少し追及してみたい。

注釈

＊1 胚胎(はいたい) 物事の起こる原因やきざしが生じること。
＊2 濫觴(らんしょう)- 大河もその源は觴(さかずき)を濫(うか)べるほどの小さな流れであるという「孔子家語」の言葉から、物事の始まり。起源。
＊3 国粋主義の鼓吹-国家に固有の文化・伝統を礼賛することで国家意識の発揚をはかる思潮や運動(国粋主義)をさかんにするの意味。
＊4 顕宗天皇（けんぞうてんのう）- 記紀・『播磨国風土記』に伝えられる第 23 代の天皇で在位：顕宗天皇元年（485 年）-同 3 年（487 年）。
＊清涼殿 5-平安京の内裏における殿舎のひとつ。仁寿殿の西、後涼殿の東。
＊6 寛治五年-1087 年
＊7 闘鶏(とりあわせ)- 鶏と鶏が戦う競技のこと。＊図 1 闘鶏
＊8 草餅-古くは＊図 2 ハハコグサ（母子草）を入れて作った餅をさす。
＊9 蓬餅-＊図 3 蓬の葉を入れた餅
＊10 菱餅-菱型の餅で雛段に添えられた。初期は青と白の 2 色だった。

*図 1 桃の花

*図 2 菖蒲の花

三月三日が桃の節句と呼ばれ祝い日とされていたのは、分かっているが、三月三日上巳の日は＊図 1 桃の節句とは呼ばれない。勿論、上巳の日という名称も一般の人には無縁だと思う。ではその上巳の日の名称そのものが廃れたのかといえばそうではなく、この名はずっと生き続けていた。

「国民の祝日」の由来がわかる小事典　所　功(ところいさお)著　ＰＨＰ新書　二００三年八月二十五日第一版第一刷。この中から必要な部分を抜粋してみよう。

―大宝元年（七００年、奈良時代）に制定された「＊1 神祇令(しんぎりょう)」に季春（三月）に『鎮花（はなしずめ）祭』、その附則である「雑令(ぞうりょう)」に、『三月三日を節日とする』―とあり意外な事実に驚く。だが同書では、それが後に何故不祥の日になったか触れていない。それが闘鶏の日となったことは述べられていてもその由縁などにふれるものはない。

更に時代が下り、江戸時代になると、徳川幕府は古来の五節句を幕府の年中行事として祝いの式日として定めた。三月三日はその内の一つである。

更に更に時代が下り、明治維新、新政府は明治三年太政官布告によって、祝日を定めた。その内の一つに「三月三日上巳の節句」―とある。ここまで、三月三日上巳の呼び名は生き永らえていたのである。

然し、それから三年後、―政府は明治六年元日、旧来の暦を＊2 新しい暦に変えました。続く一月、太政官布告によって、それまでの祝日を廃止した。その中の一つが三月上巳の日である―

ここで、不祥の日が祝い日と内容は変わっても、わが国の伝統行事の日として続いてきた「三月三日上巳の日」は漸く終焉を迎えることとなった。

ところで三月三日は又「桃の節句」と呼ばれ、一般にはこの呼び方が馴染まれているがそれは、何時ごろからどうしてそう呼ばれるようになったのか、所氏の小事典にかかれているものを引用してみる。

―三月三日は旧暦季春のはじめ、まさに桃の花も満開の頃であるが、花粉などが飛び散って病気にかかりやすい。その為か、中国でも日本でも、水辺に出て汚れを祓い流す風習があった。とくにわが国では知らず識らずの間につく心身の罪穢れを除く

ため、人の形をした人形(ひとがた)をつくってそれに自分の息をふきかけて汚れを写してから水に流した―　以下省略。

これでは、何故桃の節句と呼ばれたのかよく分らず、唐の故事から上巳の日が取り入れられた頃には既に「桃の節句」の呼び名があったようにも受け取れる。（大宝令に花鎮祭の規定はあるが、その花が桃の木限定の意はないようである）然し、その典拠は見当たらない。又、花粉が飛び散って云々は現代の杉の花粉の騒動を連想させ、どうも現代感覚の付会の説のように読めて仕方がない。

桃の木が邪気を払うものとする風習はわが国上古からあったようだ。日本書紀の神代の記述にイザナギの尊(みこと)が、亡き妻イザナミの尊のいる＊3 黄泉(よみ)の国を訪れ逃げて帰る時危難にあうが、その情景を同章の「第九の一書」では、イザナギを追って来たのは、八色雷公(やくさのいかずちこう)である。イザナギは大きな桃の木に隠れその実をとって雷に投げつけたら、雷共は走り逃げた。これより、桃の木は雷を避けるものといわれるようになった。雷は即ち、人間に災いをなすもの、桃の木は災いを払うものとされるようになった。とある。

この鬼を避けるために桃をもちいるのは、後の延喜式中務省式（当時の法令）にも見え、中国の書には＊4 楚の国の歳時記に桃の木は鬼や疫病から身を守る術に使うとある。桃の木が邪気を払う力があると、古くから信じられていたものであろう。

その素地の上に立って、雛祭りが始められると、これに「桃の節句」を重ねるのはごく自然だったろうと思われる。「端午の節句」の＊図 2 と対比すればよく分るのではなかろうか。菖蒲も魔を払うものとされている。菖蒲は五月、桃は三月の植物である。五月五日、三月三日、それぞれに季節の香りを供え、どちらも災いを退ける力を持っているものと信じられていた。又、菖蒲の香りはかなり強い刺激を持ったものである。それと比べれば、桃の香りは甘く優しい。端午の節句は男のもの、桃の節句は女の子のものとされるのは、そうした感覚的な由縁も又ごく自然なように思われる。

と、このように解釈してみたが、それが何時の時代から「桃の節句」の呼び名が始まったのかは不分明のままである。

三月三日の節句の日が、俗に［桃の節句］の呼び名で一般的に馴染まれるようになったのは多分、雛人形を飾るようになって、三月三日は季節が丁度桃の花の咲く頃、その姿や匂いが雛飾りの傍におくのにふさわしいと思われたのであろう。そしてそれが一般に定着して三月三日を「桃の節句」と呼ぶようになった、とする俗な解釈も目にしたことはあるが広く一般の人に「桃の節句」の名が浸透した理由はそれなりにいいのかも知れないと思う。

―節句はもと節の日に供えるものの意で、「節供」と書く。季節により特に定められた祝いの日を「節句」と呼ぶ。正月が七草粥、三月三日に草餅、五月五日に粽(ちまき)というように決まっています―岩波版古語辞典より。

以上三月三日上巳の日と関連する事象を述べてきたが、結局、上巳の日の名称は永く残ったが、当初不祥の日とされて祓が行われたことと、「ひとがた」に穢れを移し、川や海に流した行事が何時頃から廃れたのか不分明のままに終ってしまった。

以上で「上巳の日」の考察を終わります。

注釈

＊1 神祇令-神にまつわる儀式を法制化したもの。
＊2 新しい暦-新暦のこと。改暦後の暦法のことである。改暦前の暦は旧暦という。太陰太陽暦から改暦した太陽暦（グレゴリオ暦）のことをさす。
＊3 黄泉(よみ)の国 - もともと「地下の泉」の意味であり、地下にある死者が行くとされる場所のこと
＊4 楚-　（？ - 紀元前 223 年）は、中国に周代、春秋時代、戦国時代にわたって存在した王国。

次に「雛流し」について。

＊図 1 流し雛

先の三月上巳の日の解明で、「ひとがた」を海に流した故事と後世の「雛流し」の風習とに直接的接点は見出せないことは言を待つこともないと思う。接点があるとすれば、三月三日という暦日が同じということのみのようである。さらに言うならば、川や海の水は清浄なものであり、すべてはこの水によって清められるという、古来、日本人の信仰的心情が両者に共通とでも言おうか、それくらいのものであろう。

「上巳の日」を不祥の日として、祓いを行い、「ひとがた」に身の穢れを移し海に流した宮廷行事が後世の「雛流し」の起原であるとするのはやはり無理であろうと思う。後世の「雛流し」に就いては、次項で考察してみたいと思うが、ここでは、前出の『有職故実』の著者江馬務氏の著作になる「江戸時代の風俗史」の中の「歳時の章」で「雛流し」関連部分を引用しておく。

―雛はその他地方に各種のものがあった。階級は多く公卿であるが町人雛もあり、年齢も中年のものが多いが、稚児や百歳雛というものもあり、男女一対でなく男子のみのものもあり、木、陶、裂、糸、草、紙等の製作品もあって木では奈良雛、板雛、陶器では吉野雛、浅草一文雛、裂では琉球雛、糸では薩摩の糸雛、紙では伊勢菜の花雛、草では三河万個雛などがあり、水に流した祓の人形(ひとがた)から変化した経路は地方の雛によりて徹しえられる。―

これは、江戸時代の雛祭り、雛人形の時代変遷を述べた後に書かれている文だ。これ以外に説明が全くないので理解に苦しむところ多いが、これは地方における「雛流し」に用いられた「雛」の実例をあげたものではないかと思われ、これだけでは「ひとがた」を海に流した古代、祓の風習が後世の「雛流し」の風習になった直接的な証左―水に流した祓の人形から変化した経路は地方の雛により徹し―とはならない。

つまりその風習は何時頃、何処から伝えられ、どのような約束事と形や行為で雛が流されたか。それらの解明なしでは、何となく似ているからというだけでは無理にこじつけた説といわれても仕方がないと思う。江馬氏はその著『有職故実』の中で、三月上巳の日の祓いの後、［ひとがた］を海に流した故事が「雛流し」の起原であることの提唱者である。

古代、上巳の日の「ひとがた流し」は呪術の祓であり、先に引用した光源氏のように、陰陽師が介在してとり行った儀式のようなもので行われる。それに比べ後世の流し雛は、陰陽師のような介在者を必要とした例を聞かない。また、地方の地域社会の行事として行う以外にも、個人が任意の日に任意の水辺で雛を流してこれを見送ったという風習も、文学作品などに散見できるようだ。これらは、雛人形を粗末な扱いにならないよう、叙情的な感傷をこめた人形の処分法とでもいうべきことであろうと思う。この雛流しに就いては次項でもう少し触れよう。

四、　加太守雛(かだもりびな)　　信仰の対象物。

図 1 淡島神社

これは古い時代から今に伝えられる肌守りとして信奉者の多い、和歌山県加太市＊図 1 淡島神社(加太神社ともいわれる)の発行するお守りである。このお守りは、男女の幼児の姿が描かれている特異なものだ。「守り雛」の名はそこら出ている。幼い、可愛いの意味を持つ「雛」を名称としたのは、この一対の幼児の姿とお守り自体の大きさなどの形態から名づけられたものであろう。

淡島神社の古い伝えでは、＊1 神功皇后が参拝され、男女の幼児を描いたお札をつくらせ、女児を災厄から守り、その行く末の幸福を神に祈願された。その由来から＊2 淡島神社では小さなお守りをつくり、「加太守雛(かだもりびな)」として一般へ広めた。近畿地方一円から西国あたりまで、このお守りの信奉者は随分多かったらしい。勿論現代でも続いている。

ところで、このお守りを持った人の中には、何らかの理由でこれを処分しなければならなくなった場合が生じた。例えば、汚損して新しいお守りを頂くとか、娘が成長して不用のものと考えるようになったとか、理由はともかく、処分しなければならないが、他の塵芥同様に捨てるのには抵抗がある。神様のお札を粗末には出来ない。そこで帰結するのは川や海へ投ずることだ。川と海の流れを清浄なものと見るのは、太古以来、日本人に染み付いている心情である。

それが何時の間にか、川や海に流した加太守雛はどこで流しても必ず淡島神社へ流れ着くという俗信が生まれた。実際にも川や海辺に浮かべられた後、潮に乗って遠く流され、淡島神社傍の浜へ打ち上げられる加太守雛は少なくなかった。これは俗信とは別に、現実の地形と海流を考えればこの現象は至極自然なものだ。淡路島と和歌山県の間の、由良の瀬戸から紀伊水道へと流れる下げ潮が、瀬戸の中の友が島すぐ傍の淡島神社の浜へ漂流物を打ち上げるのは当然である。これを自然の物理的現象とみるか、神意とみるかは信心次第であろう。

この俗信と共に、[加太守雛]を川辺、海辺で流す風習は各地に広まった。

当初は恐らく個々人が密やかに、「加太守雛」を何かに乗せて水に浮かべ、両手を合わせて、それまで災厄から身を守ってくれた感謝の意を表しながら、流れに乗って去って行く守雛を見送っただろうと思われる。これは行事ではない。任意の素朴な行為である。
この「雛流し」の風習が、宮廷で行われた三月上巳の祓と「ひとがた」を海に流した儀式と関連を持つとは考え難い。あくまでお守り信仰から生まれ、人間感情からの自然発生としての行為である。そして、勿論のことだが、各地で行われた「流し雛」の習俗の源流とも云えないであろう。「雛を流す」という呼称は同じであっても、その習俗の生まれた地域によって、それぞれの故事来歴があり、それがすべて同じ起原に由来する訳ではないようだ。

『雛祭新考』に面白いものが掲載されている。鳥取市近傍に流し雛の風習があり、雛を流す理由として、「お雛さんが可哀相だ」と云う、とある。これを「雛祭新考」では、―汚穢を転嫁する雛は自己の身代わり―だから可哀相と解釈し、これも祓の観念をそのまま伝えているものと断じている。
だが、果たしてそうだろうか、お雛さんを飾り、それが一度きりの恒久的なものでなく、処分しなければならなくなっても、塵芥と共に打ち捨てるのは忍びない。それではお雛さんがあんまり可哀相。雛を飾るのが若い女性、あるいは女児ならそうした感情を持つのはごく自然と考える方が当を得ていると思う。人間の風習は、何時の場合も故事来歴あってのものとは限らない。人間感情が多くの共感を得た時もまた一つの風習を呼ぶ。

もう一度「加太守雛」へ戻ろう。
『雛祭新考』では「淡島神社の縁起」を、
―柳亭種彦(りゅうていたねひこ)が社司の求めに応じて起草したものだと云う―

と説明の冒頭から、作り話のいい加減なものだとして一々、付会の説としてしりぞけている。柳亭種彦は江戸時代の草紙類の作者である。
ここで『雛祭新考』は、大きな誤りを冒しているのではなかろうかという疑問を持たせる主張をしている。

―淡島信仰は室町末期か江戸初期―とし、その実証として―東京浅草寺内に鎮座する淡島明神社の創建は寛永十九年―であり、それ以前に東国に同社創建のことはないとして、淡島神社は新しいものであり、神功皇后の時代には存在していなかった。

ということだが、この著者には妙な偏見があるようだ。つまり、つまり、江戸にあるも
のが基準であり、江戸に伝わった時期から考えればその基であるものがそう古くから存在したものではない。と言うわけだ。江戸に伝わろうが伝わるまいが、そのものが古代から存在していたものはいくらでもある。

今一つの主張は「あわしま」と呼ぶ乞食の勧進だ。淡島信仰の伝播(でんぱ)によって力のあったのはこの「あわしま」で、この姿が出現したのは江戸期以前にはない。と、これも淡島神社が古代の創建ではないことの説明だとしている。

これも妙な主張だ。例えば、江戸時代、お伊勢参りが盛んに行われ、庶民の家には「お伊勢さん」の御札が祭られた。これを捉えて、伊勢神宮の創建は江戸期をいくらも遡れないと言ったとしたら、誰が耳を傾けるだろう。

「あわしま」という乞食勧進は、関西から西では、「あわしまさん」の呼び名でしられていて、昭和の時代まで各地を回っていた。「勧進」というのは、寺社が社屋、仏閣の修理、再建等のため、寄付を募って各地を回ることである。この「あわしま」に限らず、当初は寺社の為の寄付集めであっても、その目的を達して用済みとなった後、物売りだとか物乞いに成り果てる者もいた。寺や神社の名を出せば、簡単に銭が

得られるとずるく考える者があっても不思議ではない。『雛祭新考』で「乞食の勧進」と見下げ果てた表現をしているのは、これを書いた昭和年代の「あわしま」の姿だろう。当初の「あわしま願人」として、「加太守雛」や護符を持ってあわしま信仰の普及に努めた者のあったことは、記録にないだけで、他寺社の幾多の例で想像出来ることだ。

あえて擁護する筆致になったのは、淡島神社の「加太守雛」が、普通のお守り札に、小さな男女の絵姿がついていて、雛の文字が付けられた特殊なもので、先述のように近畿圏から西の地方で、加太守雛を川や海に流すと、どこから流しても、淡島神社へ流れ着くという俗信が古くからあったとされ、これが「雛流し」の源流ではないかという思いがあるからだ。然し、それを証する確たるものは見出せないでいる。
「雛流し」の風習は全国各地にあったようだが、今ではそのほとんどが廃れているようだが、それの行われた由来のものが、伝説的に残っているようだ。然し、雛祭に結びつくものはなく、その地域ごとの由縁からのようだ。「雛祭新考」ではこれに就いて広く詳しく触れてあるが、「上巳の祓」に結びつくものも又ないようである。

注釈

＊1 神宮皇后-、201 年から 269 年まで夫の仲哀天皇を助けて政事を執り行なった。
＊2 淡島神社-(加太淡島神社ともいう)
淡島神社ホームページより

―その昔、神功皇后が三韓出兵からお帰りの際、瀬戸の海上で激しい嵐に出会いました。沈みそうになる船の中で神に祈りを捧げると、お告げがありました。「船の苫（とま）を海に投げ、その流れのままに船を進めよ。」その通りに船を進めると、ひとつの島にたどり着く事が出来ました。その島が、友ヶ島です。その島には、少彦名命（すくなひこなのみこと）と大己貴命（おほなむじのみこと）が祭られていて、皇后さまは助けてくれたお礼の気持ちを込めて、持ち帰ってきた宝物をお供えになりました。その後、何年か経ち、神功皇后の孫にあたられる仁徳天皇が友ヶ島に狩りに来られ、いきさつをお聞きになりました。そこで、島では何かとご不自由であろうと、お社を対岸の加太に移され、ご社殿をお建てになったのが、加太淡嶋神社の起こりとされています。―
―男びな女びなの始まりは、淡島神社のご祭神である少彦名命と神功皇后の男女一対のご神像であるとされています。また、雛祭りが三月三日になったのは、友ヶ島から対岸の加太へのご遷宮が、仁徳天皇五年三月三日であったことから。雛祭りの語源も、スクナヒコナ祭が後に簡略化されて、ヒナまつりと言われるようになったとされています。―

五、「雛人形」の発祥とその推移

「人形（ひとがた）」ではなく、「人形（にんぎょう）」と呼ばれる、人の姿、形、まとわせた衣裳をリアルに写した形態を持つ造形物が、一般庶民の家庭に入り、遊びの対象としての愛玩物或いは鑑賞の対象としての愛好物として用いられたのは何時の頃か定かではない。平安、鎌倉の時代から、＊1 傀儡師(くぐつし)や寺社で布教の為用いられた操り人形はあったが、一般にひろく愛用された人形とは形態が違うものであった。これら操り人形とは違う普通一般に用いられた愛玩用の人形の出現時期は不明である。

『雛祭新考』その他の研究書で、「＊2 お湯殿の上(おゆどののうえ)の日記」（文明十一年　１４７９年）、「＊3 言継卿記」（大永七年　１５２７年）を取り上げているが、現代で言う人形のような造形物であったか否かそれに触れるものはない。だがこの資料を基に、「雛人形」の出現は、室町中期までは遡れる(さかのぼれる)、としている。だが、この説は早計に過ぎるのではなかろうか。この資料の引用を読む限りでは、「ひひな」「ヒヒナ」の文字はあるが、その形状に就いては記されていない。「ひひな」に雛の文字を当て、後世の「雛人形」の初めとするのはやはりおかしい。資料精査と時代的傍証が必要なのではなかろうか。「雛人形」の出現とするには、室町末期のものと略、形態、扱われ方に相似するものがあるべきだと思う。

人形史の研究家によれば、＊4 室町時代末期には京都、宇治あたりで現代の人形と同じような愛玩物が相当作られていたようである。その人形は、作られた土地、作った職人の名を冠して名称としていた。例えば「宇治人形」「弥八人形」のように。

それらの人形の中で、作った職人が「雛人形」と名づけた人形が現れた。それまでに「雛人形」の名称を持つものはなかったのではないかと思われる。それがどのようなものであったか不明だが、慣習的に、土地名、或いは作者名を名称としていた人形とは違い、「雛人形」と名づけたのは、恐らく他の人形に比べ一見して分る形態のものだったからではないだろうか。「雛」即ち、小さく愛らしい。その外観からの印象をそのまま呼び名としたのではなかろうか。その命名の由縁は不明としても、はっきり「雛人形」の名で世に出たのはこれが最初であるようだ。
他に、これに代わるものが見出せない以上、これを「雛人形」の発祥と云って差し支えないのではなかろうか。

当初、単体であったか又その形態も不明だが、やがてそれは男性を象ったもの、女性のそれと分化して「をびな」「めびな」の名称を持った。恐らくそれは、他の人形と同じように、それぞれが単体として作られ、その需要もあったらしい。

それがやがて、「をびな」「めびな」を特徴的な組み合わせで一対としたものが作られるようになったには、文献資料もあるようだが、ともかく、室町末期の短い時代から安土、桃山の時代へと世が変わっていく。その間に当初の、「一対の雛人形」を素地として、男女の貴族の坐像を模した人形が作られた。「をびな」の衣裳は「衣冠束帯」、「めびな」のそれは「十二単」という、他の人形には見られない風格と豪華

さを備えたものである。この男女一対の雛人形が、作成する前から意図された名称なのか、作成された後から時人が呼ぶようになったのか判然とはしないがこの雛人形は「お内裏(だいり)さま」と呼ばれ現在でもその呼び名は踏襲されている。

この「お内裏さま」が生まれたのは、京都という土地柄と、安土、桃山文化の時代風潮を思う時、至極自然だったように思われる。因みに京都人にとって、皇室は尊崇の的であると同時に、日常的に身近なものとして親近感を持っている対象でもある。それで、天皇の住居を指す「内裏」から呼んだ「お内裏さま」は内々には「お内裏さん」と親しみをこめて呼んでいた。

この内裏人形は、その姿、形が一般の人にとって非日常的なものである。「男雛」のしゃくを持つ衣冠束帯姿は高貴な威厳を備えた雰囲気を漂わせ、[女雛]の十二単に冠を頂き、檜扇を持った姿は絢爛として優美なものであった。これを手に入れた人は他の一般の人形のように、遊戯の道具や飾り物として愛玩の対象であるものとは同一視できるものではなかった。特異なものとして飾り方を考えただろうと思われる。そうした「内裏雛」には又、見る者殊に女子に、感嘆と同時に憧れの念を生じさせ、その背景にある貴族生活には及びはつかなくても、将来、せめてそれにあやかられるような暮らしが出来るようになりたいものだという、願望さえ抱かせるものがあった。

同じ時代に、前項で触れた「加太守雛」が普及していた。[加太守雛]には小さな男女の絵姿がえがかれている。同じ飾るにも他の人形とは違う扱いをした[内裏雛]の傍らに、大切にしているこのお守りをそっと添えたくなるのは自然の人情であろうと思う。これより後のことだが、雛人形が雛壇を備えて飾られるようになって、貴族の中にはその家に古来伝えられてきた[あまがつ、ほうこ]を雛壇にそっと添えるようになり、それは現在も続いている例があるようだし、江戸時代、雑多なものが雛壇を賑わせた中にこれが見られるものもあった。「加太守雛」を添えたのも同じ心情であろう。

しかし、「あまがつ、ほうこ」は呪術、「加太守雛」は信仰、雛人形はそのどちらにも属さない。然し「あまがつ、ほうこ」「加太守雛」共に、幼い子供を災厄から守り行く末の幸せを招来するまじないがこめられている。[加太守雛]は神職を介在として神の加護がこめられているものと信じられている。雛人形にはそのような神性はない。

他の人形同様に単なる飾り物としての物体だが、[加太守雛]と並べたことで、その特異な優美さがあこがれを誘うと共に子女の将来の幸福を願う気持ちを託すものとなった。勿論この解釈は当初からこれを飾る人々が一様に持った気持ちではない。誰かがそう思い、次第にそれが広まりという自然発生的に、お雛さまは娘の将来の幸福を願って飾るものという意識が習慣として定着していったものであろう。そしてそれが、女児の誕生を祝って飾るもの、女子の結婚のさいには、嫁入り道具の中に入れるものというような習俗も生んだ。

娘の健康と幸せを願って雛人形を飾るという習慣意識は現代においても、多くが人々の持っているもののように思える。

注釈

＊1 傀儡師-流浪の民や旅芸人

＊2 お湯殿の上(おゆどののうえ)の日記-宮中に仕える女官達によって書き継がれた当番日記。天皇の御所の中にある御湯殿の側に女官達の控えの間があり、そこに備え付けられていたといわれている。当番の女官によって交替で書かれたもので稀に天皇が代わりに書いたと思われる部分もあるとされている。

本来はいわば宮中の機密日誌（秘記）であり非公開のものであったが、後日の参考のために写本が作られる場合もあり、そのため正本・写本・抄本を合わせると室町時代の文明 9 年（1477 年）から文化 9 年（1826 年）の 350 年分の日記が途中に一部欠失があるもののほとんどが伝わっている。特に戦乱の激しかった戦国時代の記録が残されているという点で貴重な史料である。主に天皇の日常の動向が記述の中心であるが、宮廷行事や任官叙位、下賜進献などの宮中での出来事、皇族や女官の動向等、政治の表舞台には現れないような記事も見られる。『群書類従』に慶長 3 年（1598 年）分が収録されて以来、宮廷史・政治史の根本史料として注目されるようになった。

＊3 言継卿記（ときつぐきょうき）-戦国期の公家、山科言継の日記。1527 年から 1576 年の 50 年に渡って書かれおり有職故実や芸能、戦国期の政治情勢などを知る上で貴重な史料。

＊4 室町時代-足利氏が京都室町に幕府を開き、政権を掌握していた時代。足利尊氏が建武式目を制定した 1336 年から、一五代義昭が織田信長に追放される 1573 年までをいう。その前期を南北朝時代（1336-1392）とよび、また 1467 年の応仁の乱以降を戦国時代とよぶことも多い。

六、［雛祭］の起原とその変遷。

安土、桃山時代、雛人形が他の愛玩用人形とは違い、部屋の一隅に独特の空間を占めて飾られるようになったらしいことは、何となく明らかになった。しかし、その飾られるのは特定の日か、その日は一般的に一斉に飾ったのか、それを祭りと呼んだのは何時からか、これまた不明のままである。祭りという以上皆が一斉にと云う考え方もあるが、唯一軒の家の催しを祭りと称して賑やかに行う例は多々ある。雛祭りが、広く一般的に祭りと呼ぶ認識を共有するようになったのが何時ころのことか不明なのだ。

このことは、徳川家康が関東に領地を得て江戸の地に居城を定め、城下町の経営に乗り出して後更に幕府を開き、いわゆる江戸時代に入っても尚雛祭りの行方は不分明のままである。

天下の実権を握った幕府は武家の新たな制度、行事などを整備していったのだが、その一環の中で、「＊1 五節句」を定めその一つを「桃の節句」として祝い日に定め、雛祭の行事を城中で公式に行うこととした。当日武家一同は、＊2 熨斗目長袴*図 1（のしめながばかま）の式服で登城して城中で「雛祭」の儀に参列して祝った。

と記録にあるようだが、残念ながらそれが徳川何代将軍の時かはっきりした記録がない。徳川家に就いては、多くは確かな古文書が現存することで、大抵のことは分るらしいのだが雛祭は分らない。

それはともかく、徳川幕府が、三月三日を祝い日として雛祭を行うと定め、代々この行事を行って来たのは確かな事実のようである。

図 1 熨斗目長袴

「雛人形」は、官の制度から生まれた習俗の影響もなく、全く民間の、思いつきが生み出した、それ自体に意味を持たせない造形物である。それから派生した飾り方の習俗を、徳川幕府が新しく制度を定め、それに組み込まれた行事の中に取り上げ、三月三日、桃の節句として雛祭を行うと制定した。

そこで、雛人形や雛祭の起原を、遠い古代の風習に故事来歴を求め、あやふやなこじつけを論う(あげつらう)よりも、［雛人形］が室町末期に生まれたと同様に、「雛祭」の起原を徳川幕府制定の時とするのが一番妥当な考え方と思われる。

民間では、三月三日に雛人形を飾る雛祭は、習俗として今日至っている。

ここで関連して思い浮かべるのがやたらと増えている国の祝日のことだ。その祝日の意義も国民に余り理解されず、一般的には特段の行事もなく、単なる休息日としてレジャーで過ごすものが多い。

そこで、明治政府によって祝日から除かれた三月三日をもう一度、端午の節句＝子供の日と同様に雛祭りの祝日として公に復活させてはいかがであろう。雛祭を再認識でき、薄れいく日本の心をいくらかでも繋ぎ止める、よすがともなると思うのだが。三月三日雛祭を祝日に。と、これは雛祭行事の変遷を見てきた感想であるが、その変遷の最後を飾るものとして、祝日としての復活が実現すれば喜ばしいことだと思う。

ところで、幕府は三月三日を祝日と定め城中雛祭の祝いを行うようになったが、幕府としては一般社会の庶民までこの祝日を押し付けることは無かった。当時の町人社会では、三月三日又は四日は［出代わり］といって、雇い人の交代日だった。引き続き勤める者、新規の者と、人事の出入りの日でとても祝い日として休む暇はなかった。それから、三月十七日、十八日が「＊3 三社祭」の祝い日で雛祭りは何となく霞んでいたような感じである。とはいうものの、二月二十五日からは雛人形の市が立ちそれなりの需要はあったのではあるまいか。三月三日に内々で［雛祭り］を祝った家庭は少なかったのかも知れない。但し、その家庭が武家の家庭に限られていたのか、町人社会にもあったものか、要するに、家に飾った家庭の分布状況は分からない。（町人社会の行事は、江戸歳時記より）

江戸期の雛人形、雛祭の変遷に就いて、先出の風俗研究所長江馬務氏の「江戸時代風俗史」の中から引用してみよう。

—三月三日の項—

雛祭は江戸時代になっても始めは必ずしも三日とは定まっていなかったのが、＊明暦(めいれき)頃から定まってきたらしい。

江戸初期には、雛に室町雛、＊4 寛永雛、＊5 元禄には冶郎左衛門雛(じろうざえもんびな)があり、室町雛は顔面積が広く、治郎左衛門雛は固くて＊6 有職衣紋(ゆうそくえもん)も正しい。立ち雛とて立ち姿もあるが、その他は正座している。

その祭法は雛壇もなく、ただ毛氈を敷き、雛の他に屏風、這子、犬張子、曲げ物に絵を描いた檜櫃(ひびつ)、行器(ぎょうき)、折敷(おりしき)、駕籠(かご)、給(きゅう)に甘酒を入れた銚子や膳を供える位のことで極めて簡単であった。

然るに＊7 享保(きょうほう)頃からは雛も享保雛といって、顔の細長い目の釣りあがった顔の金襴などで作った有職を無視した雛が出来て、段を二三段も構え、衣桁箪笥長持(いこう・たんす・ながもち)を加え、美男で名うての佐野川市松の似顔絵たる市松人形を置くなど、段々家庭趣味を加えた。

江戸後期になると、原舟月の古今雛とて束帯十二単の雛が出来たが壇も更に増加して五六段とし、雛の他に隋身、女房、五人囃子、三人上戸、桜橋などを加え、調子も台所道具、茶弁当、煙草盆、火鉢、化粧道具、玩具などの一切の嫁入り道具を網羅し

夜は雪洞を点火して親戚友人を招いて饗することとなった。初期には雛使とて、雛を乗り物に乗せ、樽、行器等を釣台に載せ親戚から贈ることもあった。）

注釈

＊1 五節句-人日（じんじつ）（1 月 7 日)、上巳(3 月 3 日)、端午(5 月 5 日)、七夕(7 月 7 日)、重陽(9 月 9 日)の五つを五節句といいます。
＊2 熨斗目長袴-熨斗目は袖の下部と腰の辺に、柄が横につながるようにした模様で武士の着物から発生した。長袴は裾の長い袴のこと。
＊3 三社祭（さんじゃまつり）-毎年 5 月に行われる東京都台東区浅草の浅草神社の例大祭である。江戸時代には、隅田川から観音像が現れた日に因んで 1 年おきの 3 月 17・18 日に本祭（ほんまつり）が行われた。現在は 5 月第 3 週の金・土・日曜日に行われる。正式名称は「浅草神社例大祭」。
＊4 寛永-日本の元号の一つ。元和の後、正保の前。1624 年から 1643 年までの期間を指す。この時代の天皇は後水尾天皇。
＊5 元禄-日本の元号の一つ。貞享の後、宝永の前。1688 年から 1703 年までの期間を指す。
＊6 有職衣紋-過去の先例に則った装束の着付けの方法。
＊7 享保-日本の元号の一つ。貞享の後、宝永の前。1688 年から 1703 年までの期間を指す。

以上で、ざっとしたものだが、江戸時代の雛祭りの変遷は凡そ察しられるだろう。これ風俗史（町人、一般の風習）としては面白いものでだが、武家、貴族の雛祭りはもっと格調高く優雅なものではなかっただろうかと思われる。然し、それを系統立ててまとめた資料はない。貴族武家の日記、あるいは物語などに散見できるかも知れないが、浅学の徒にはその知識がなく不明である。

これから後の、明治、大正、昭和と時代ごとに変化と盛衰はあったが、三月三日の雛祭の風習は連綿と続けられて今に受け継がれ、雛人形に娘の幸福を願う意をこめ、華やかな風物詩として愛好されている。

― 結　び ―

以上で「雛祭り起原」に就いての、所説の幾つかを取り上げて検討してみた結果の提出を終わります。内容的に、「らしい」「ようである」等、あやふやな表現が目立ちますが、これは取り上げた所説そのものが内包するあいまいさの為です。その根底にあるのは、神道、呪術、信仰、を混合した思考の混乱、そしてそれが無理やりこじつけた論を生み出している部分、そういったものです。最初から、これを起原とする発想があり、歴史的な資料を都合よくあてはめていく、素人目にはそのような操作が感じられるのです。それがあやふやな論理に思えました。

江戸時代はその変遷をざっと触れましたが、雛祭起原に就いて、山東京伝という草紙作者が、風俗史に興味を持ち、その中で取り上げたなど、面白いものもあるようですが、割愛しました。この度の検討で、引用を割愛したものが随分あります。何時の日かこれらを提出し、今回の検討の補強としたいと思っています。

終り。

参考文献

『 有職故実 』国文学大講座刊行会昭和十年刊、著者:風俗研究所長、江馬務著
『 雛祭新考 』思文閣出版昭和十八年刊、著者･有坂與太郎
『内閣文庫所蔵史籍叢刊-慶長見聞録案紙、慶長日記、慶長･元和年録』昭和六一年発行　汲古書院発行
『徳川実紀-台徳院殿御實紀巻四十元和元年是年』
『日本人形史』山田徳兵衛･著
『生活文化歳時史 第Ⅱ巻』東京書籍 1990 年刊、半澤敏郎･著
『日本史総年表』吉川弘文館 2001 年刊、加藤友康･著
『節句の古典 花と生活文化の歴史』雄山閣出版平成五年刊、著者･桜井満
『日本玩具史(前篇)』思文閣出版昭和六年刊、著者･有坂與太郎
『「国民の祝日」の由来がわかる小辞典』PHP 研究所 2003 年刊、所 功･著
『日本年中行事辞典』角川小辞典 鈴木棠三･著
『日本歳事全史-江馬務著作集 第八巻』中央公論社　昭和 52 年刊、江馬務･著
『年中行事の研究』桜楓社 平成 4 年刊、田中宣一･著
『江戸幕府大辞典』吉川弘文館 平成 21 年、大石 学･著
『徳川幕府辞典』東京堂出版 竹内誠･著
『折口信夫全集第三巻』中央公論社 昭和 41 年刊、折口博士記念古代研究所
『史料　徳川幕府の制度』新人物往来社 小野 清･著
『日本史総年表』吉川弘文館 2001 年刊、加藤友康･著
『日本古書通信第 860 号』平成 13 年刊、宮地哉恵子･著
『風俗史の研究』寶文館 昭和 4 年刊、桜井秀著
『日本服制史　上』文化出版局 平成元年刊、太田臨一･著
『錦絵が語る江戸の食』遊子館 平成 21 年刊、松下幸子･著
『雛人形の世界』1987 年、読売新聞社 編集人 杉林昇
『素晴らしい装束の世界』誠文堂新光社 2005 年刊、八條忠基･著

協　力
国立国会図書館
広島県立図書館
広島市中央図書館
頼山陽史跡史料館

＊ご協力いただきました関係各位のみなさまに深く御礼申し上げます。

平成 23 年 1 月吉日